第25回
IGC
マーク

第25回万国地質学会議に出席して

佐々木　昭（鉱床部）

1. はじめに

第25回万国地質学会議（25th International Geological Congress—通称 IGC）は　オーストラリアが主催国となり　1976年8月16日—25日の間シドニー市で開かれた．これはオーストラリアを含む大洋州では　もちろん　はじめての IGC であったが　南半球で開かれた IGC として　この会議100年の歴史を通じ　1929年の第15回（南アフリカ　プレトリア）に次ぐ2度目のものであった．筆者は科学技術庁国際研究集会派遣費により本集会出席の機会を与えられたので　ここにその概要を若干の印象と共に報告する．

2. 会議の規模・運営

今回の IGC の公式のスポンサーとしては　オーストラリア科学アカデミー　オーストラリア地質学会　そして国際地学連合（IUGS）が当った．　前回のカナダ　モントリオールにおける集会が　出席者総数5,300余名　総経費140万 Can. ドル（約4億3千万円）と規模も贅沢さも史上最高となったことへの反省から　オーストラリアとしては　もう少し小規模に　また費用もなるべく節減して行ないたいとの希望であったという．　最終的な数字は未だ公表されていないが　今回の出席者総数は大よそ3,700名（地質専門家　2,800名　学生　350名　同伴家族　450名　子供　100名）と言われ　総経費はモントリオール大会のほぼ1/4　25万 Aust. ドル（約1億円）余でやりくりされたらしい．　オイルショック以来全世界を襲ったインフレの波はオーストラリア経済にも深刻な打撃を与え　今大会で各種予約金の中途値上げその他予算の大幅な変更を余儀なくされるのではないかと関係者一同大いに気を揉んだことであったが　何かと先手を打った　実行委員会の周到な準備と　幸運なタイミング（会議終了後の昨年秋　Aust. ドルは約15%に及ぶ切下げを行なった）にも恵まれ　何とか逃げ切った．

第25回 IGC の組織委員会の委員長（そして大会の会長）は Dr. N. H. Fisher（オーストラリア地質科学国家審議会）また事務局長は Dr. A. Renwick（オーストラリア地質鉱産資源局）がつとめた．　13人からなる組織委員会は会議までの4年間　連邦政府　州政府　大学民間に亘る総数50余の諸機関から約140人におよぶ実行委員を動員して諸準備を進めてきたと言われる．　総予算25万 Aust. ドルの約半分は今会議への各個人の参加費でまかなわれ　残りは主に　連邦政府　ニューサウスウェールズ州政府からの補助金　そして70余にのぼる民間企業からの寄付金でまかなわれた由である．

3. 参加者

会議に集った地質専門家約2,800人の国別の内訳を中間的な出席者リストからみると　国籍数は約80で　この中10名以上の参加者を送った国を多い順に拾ってみると第1表のようになる．

地元オーストラリアからの参加者が圧倒的に多いのは当然のことであるし　米国からの出席者が相変らず多いのもいつものことであるが　総人口2,000万人そこそこのカナダから125名という大量の参加があったことにはちょっと驚かされた．　前回の IGC がカナダで開かれたということや　オーストラリアと並ぶ鉱産資源の国と

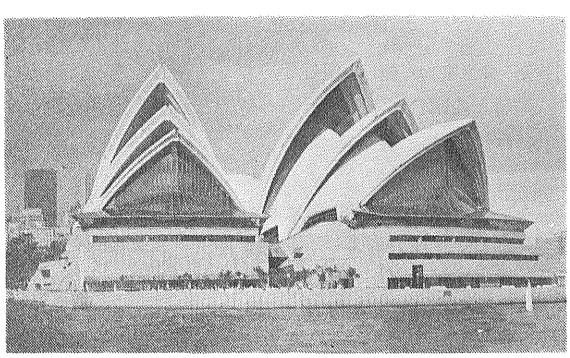

写真1　開会式場のシドニー市オペラハウス

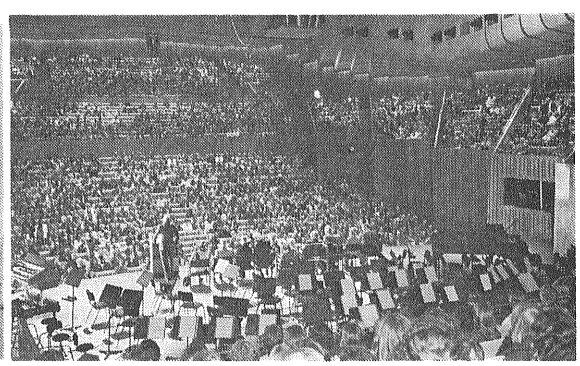

写真2　開　会　式

第1表 第25回万国の地質学会議へのおもな参加国と参加者数*および発表論文数**

国名	参加者数	発表論文数	発表部門数***	国名	参加者数	発表論文数	発表部門数
オーストラリア	1,487	279	47	イタリア	24	11	10
米国	367	214	46	スウェーデン	24	10	8
カナダ	125	67	24	オランダ	21	6	5
フランス	83	38	19	南アフリカ	20	10	7
ソ連	76	119	29	ブラジル	20	18	12
西ドイツ	62	51	27	イラン	19	4	4
日本	61	40	19	タイ	19	0	0
英国	56	35	25	ナイジェリア	16	3	3
ニュージーランド	52	38	22	インドネシア	13	1	1
インド	38	32	19	スペイン	11	8	6
サウジアラビア	27	3	3	フィンランド	10	4	4
スイス	25	8	5				

* 日本以外は組織委員会配布の出席者伝リストによる
** アブストラクト集による
*** 部門の総数は 分科会 17 シンポジウム 34で 計 51

いった事情によるものであろうか. また今回の IGC での大きな出来事は 中華人民共和国から初めて6名の代表が出席したことで これは後述するように 今回 IUGS (国際地学連合)への中国代表として これまでの中華民国(台湾)に代り中華人民共和国が正式に認められたことによるものであり 一方 当初参加が予定されていたという台湾の代表は一人も姿を見せないという不幸な結果になった.

日本からの参加者は61名(オーストラリアをはじめとする在外邦人を含む)という空前の数字に達した(前回モントリオールでの第24回大会には25名). 今回はとくに若い出席者が目立ったことが大きな特徴で これには民間旅行社が初めて団体旅行扱いで出席者を募集したことが一つの原因になったように思われる.

日本の首席代表としては前回(1972年)に引続き今回も八木健三氏(北大・学術会議)が当り また IGC の評議会および並行して開かれた IUGS総会への日本代表として 八木氏のほかに次の6氏が出席した. 池辺展生(阪大) 立見辰雄(日大) 小林勇(地調) 森本信男(阪大) 黒田吉益(信大・学術会議) 浜田隆士(東大).

4. 開会式

開会式は8月16日シドニー湾に面して建つ超モダーンな建造物 市オペラハウスのコンサートホールで開かれた. 組織委員長の Dr. N. H. Fisher オーストラリア総督の Sir John Kerr による歓迎の挨拶の後 IUGS会長の Dr. Philip H. Abelson による「前回の IGC 以後

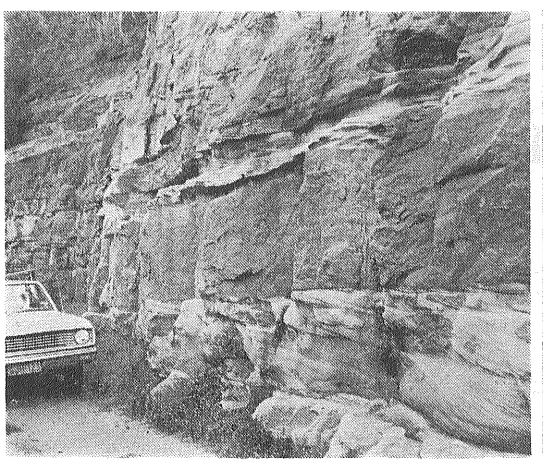

写真3 シドニー市の基盤をなす三畳紀 Hawkesbury 砂岩 偽層がつくる縞模様が美しく 市の建築石材として広く用いられてきた

写真4 主会場のシドニー大学 Carslaw Bldg.

写真5
第25回ＩＧＣを記念してつくられた郵便消印

写真6　新旧建物が並ぶシドニー大学キャンパス　手前は医学教室で Hawkesbury 砂岩でつくられている　向う側は化学教室

の４年間における地質科学の主要な進歩」と題する特別講演があり　資源衛星(ERTS)計画(LANDSAT)や深海掘削計画(DSDP)がもたらしつつある地質学　地球物理学　地球化学上の諸成果　プレートテクトニクスの発展　地震予知問題　惑星学の進歩と地質学へのインパクト　といった事柄が触れられさらに　発展途上国における地質科学の急速な抬頭や国際地質対比計画(IGCP)をはじめとする国際協力事業の進展などが指摘された．　このあとオーストラリア青少年オーケストラによるコンサートがあってから　第24回 IGC の会長をつとめたカナダの Dr. R. E. Folinsbee から会長の坐を Dr. N. H. Fisher に引継ぐとの宣言で始まる IGC 総会があり　簡単な事務報告があって開会式の行事を終った．

シドニー市は1788年ヨーロッパ殖民がこの大陸に築いた最初の街であり　現在人口ほぼ360万　オーストラリア最大の都会で　この国の文化・経済の中心でもある．市とその周辺は　二畳紀—三畳紀の砂岩頁岩互層よりなるいわゆるシドニー堆積盆の中央近くに位し　市街の各所にほとんど水平の三畳紀砂岩層がつくる崖を見ることができる．　その中もっとも代表的な Hawkesbury 砂岩は　偽層の発達が美くしい淡褐色の石英質砂岩で　開会式場のオペラハウスが建つシドニー湾沿いの崖によく露出し　古くから市の建築石材として広く利用されてきた．　今大会の本会場となったシドニー大学の多くの建物もこれでつくられている．

5. 学術講演

学術講演会は８月17—20日および23—24日の正味６日間　いずれもシドニー大学のキャンパスで行なわれ　週末の21—22日は近郊への野外巡検に当てられた．　主会場となったのは　大学の数物系講義室が集った Carslaw Building で　主な講演会場のみならず　会議への参加登録手続その他をつかさどる IGC 本部　IUGS をはじめ

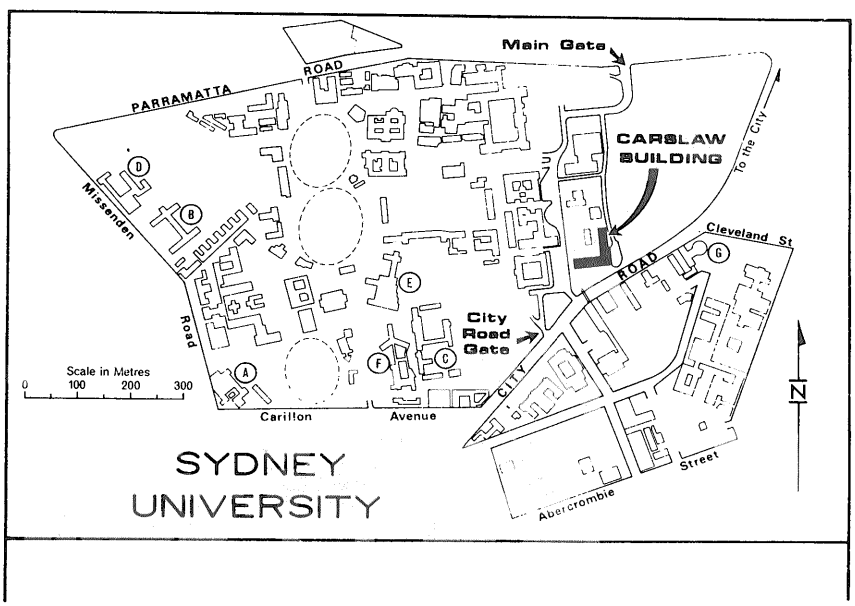

写真7
シドニー大学キャンパス　面積は本郷の東京大学全キャンパスのほぼ２倍　Carslaw Bldg. は主会場．　Ⓐ—Ⓖはカレッジで会議出席者の宿舎に使われた

とする各種の関連国際組織の事務局　特設郵便局　銀行航空会社代理店など　会議への出席者にとって必要なほとんどすべてが一つの建物の中にあって　きわめて能率的であった．　そしてここに収容し切れなかった他の講演会場や会議室も　それらのほとんどが徒歩数分で行ける近くの建物にあり移動に費す時間をほとんど気にせずに済んだことは　前回のモントリオールで会場のホテルからホテルへ時に10分以上もかかって動き廻らねばならなかったのと対照的で　今大会の運営面でもっとも印象に残ったことの一つであった．

IGC の学術講演は専門別の 17 分科会で　それぞれ次のようなテーマで行なわれた．

1. 先カンブリア代
   (A) Evolution of Archaean terrains (earlier than 2,500 m.y.)
   (B) Life in the Precambrian.
2. 岩　石
   Igneous rocks associated with island-arc volcanism.
3. テクトニクスと構造地質
   (A) Plate tectonics, palaeomagnetism, sea-floor spreading and continental movement.
   (B) Deformation and Metamorphism.
4. 鉱　床
   (A) Genesis of stratiform ore deposits.
   (B) Surficial mineral deposits.
5. 化石燃料
   Genetic relationships of hydrocarbons.
6. 層位および堆積学
   (A) Recent advances in biostratigraphy in relation to the International time-stratigraphic scheme.
   (B) The influence of submarine exploration on the study of depositional environments.
7. 古生物
   (A) Morphology and Environment.
   (B) Biogeography and Palaeo-climates.
   (C) Tertiary and Quaternary history of the Indo-Pacific region.
8. 海洋地質
   The influence of submarine exploration on the study of depositional environments.
9. 地球物理
   (A) Developments in solid earth geophysics and geodynamics.
   (B) Exploration geophysics.
10. 地球化学
   (A) Geochemical evolution of the Earth's crust and mantle.
   (B) Exploration geochemistry.
11. 水理地質
   Hydrological problems in arid regions.
12. 第四紀地質
   (A) Geological effects of late Caionzoic climates.
   (B) The laterite weathering process.
   (C) Tertiary and Quaternary history of the Indo-Pacific Region.
13. 地質工学
   The contribution of geology towards management of the environment.
14. 鉱物学
   10th Meeting of the International Mineralogical Association.
15. 惑星学
   Advances in studies of extra-terrestrial bodies.
16. 地質情報処理と数理地質学
   (A) Geological information and systems and problems.
   (B) Mathematical geology.
17. 地質教育および地学史
   (A) Geological education.
   (B) History of geology.

以上のほかに　IUGS 傘下または関連の各国際組織が主催した34にのぼるシンポジウムが開かれた．　これらを通じて発表された全論文数は約 1,200 篇で　それらの大部分の要旨（平均　約700語）はＢ５版３巻　約1,000ペ

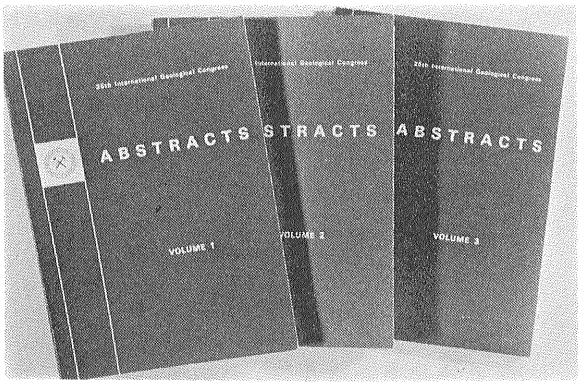

写真8　発表論文の要旨集

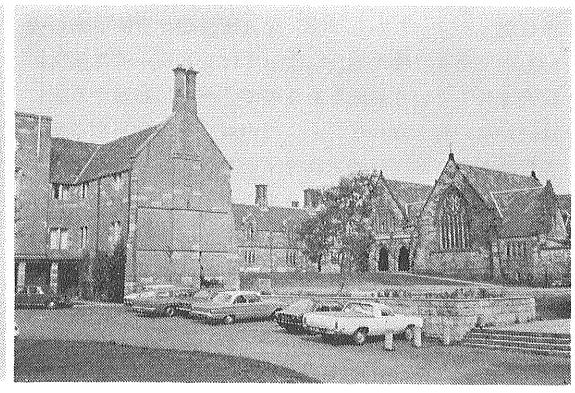
写真9　宿舎に使われたカレッジの一つ　石材は Hawkesbury 砂岩

ージのアブストラクト集に収められ　登録会場で参加者全員に配布された．

毎日のプログラムは午前中が IGC 関係　午後は一部IGCの分科会もあったが　大部分は各種シンポジウムに当てられ　午前と午後の各30分の休憩　午後1時から2時までの昼休みを除き　朝9時から午後5時まで行なわれた．　1論文に対する割当て時間は30分（20分講演　10分討論）で厳重に守られ　キャンセルの場合はそこを空白としたので　各自聞きたい講演を追って会場から会場へ渡り歩くことができたが　午前午後共15ないし20のセッションが並行して開かれており　聞きたいものが重なる場合が少なくなかった．　また会場の広さが充分でないため　セッションの途中から入ることが困難な場合もしばしばあった．

筆者は主に第4分科会の「鉱床」とそれに関連したいくつかのシンポジウムに出席したので　他部門の状況については必ずしも明らかでないが　資源の国オーストラリアを反映してか　鉱床関係の講演会場の多くはきわめて盛会であった．　数百人を収容できる会場に入り切れない聴衆のために急きょ別会場を用意し　そこへテレビ中継を行なうということも度々あった．　講演の内容は鉱液の物理化学から鉱化作用のプレートテクトニクスまで　セッションにより講演者により種々さまざまであったが　何と言っても対象が世界の各地に及ぶことがIGCの特徴でありまた魅力でもあった．

今回の会議での講演募集は　先ず各申込者が会議のほぼ1年前に当る1975年の9月末までに論文の骨子を示す梗概を提出し　それをプログラム委員会と各セッションの世話人が検討して採否を決め　採用となったものについてあらためて印刷用のやや詳しい要旨の提出を会議の半年前1976年2月〆切で求めるというプロセスで行なわれた．　このためか従来の IGC で常に問題となった余りにもお粗末な論文というのは比較的少なかったのではないかと思われるが　二番煎じ的性格のものは相変らず目立った．　しかし IGC とは所詮顔見世的要素の強いものであり　また部門によってはレビュー的な論文が歓迎されるという傾向もあるので　一概に非難する訳には行かないかも知れない．　この点 IGC 分科会よりは各世話人の意向が反映されやすいシンポジウムの方に粒の揃った聞きごたえのあるものが少なくなかったように思われる．

参加各国からどれ位の数の論文が提出されたかの目安として　アブストラクト集に基づいた主要参加国別の発表論文数を第1表に併記した．　もっともこれらの数字は　実際には講演者出席不能となってキャンセルされたものも含んでおり　セッションによっては　それを埋合わせるため地元オーストラリアの研究者を主とする緊急プログラムを組んだところもあったりしたので　実際の数字とは若干ひらきがある．　例えば今回に限らないがソ連からの論文は各セッションとも少なからざる数がキャンセルされていた様子で　それが第1表での論文数≫参加者数という関係を説明すると思われる．　またわが国からの実際の発表論文数は35であった．

学術講演の終る午後5時からの時間は　IUGS に属する各種の委員会や傘下の各国際組織の総会や連絡会などの諸会合に当てられ　関係者は講演会終了後もそれぞれに忙がしい時間を持った．

6. 野　外　巡　検

学術講演と並んで IGC の主要行事を構成するのは野外巡検旅行である．　主催国とその周辺の地質を会議出席の機会につぶさに実見できるというのが実は IGC に出掛ける多くの人の最大目的なのであるが　とくに今回の場合この傾向が顕著であった様に思われる．　会議前21コース　会議後14コース（この中5コースは会議前と同一コースの繰返し）の5—10日間に亘る充実した巡検旅行が組まれた．　これらはもちろん　タスマニアを含むオーストラリアのほとんど全土に亘ったが　さらにニュージーランド　パプアニューギニアの協力もあって10コースはこれらの地域を対象としたものであった．一方　会議中の8月21—22日の週末を利用して　1日または2日の24コースの近距離巡検もあり　上記の長期コースに参加できなかった人達の多くも　それぞれ何らかの機会をとらえてこの国の地質に接することができたのではないかと思われる．

7. 展　示

IGCで慣習化しているもう一つの行事に　各国の地質調査所を主とする機関による展示がある．　前回のモントリオールにおける GEORAMA '72 に比べ今回ははるかに小規模のものであったが　オーストラリア連邦政府や州政府機関からの種々の展示に加えて　カナダ　西独　フランス　英国　インド　イタリア　日本　オランダ　ニュージーランド　米国　ソ連などの各国が参加した．

日本からは地質調査所による次の6点の展示があった．

1. 200万分の1日本地質図（第4版）
2. 200万分の1花崗岩絶対年代図
3. 5万分の1地質図　羽後和田
4. 5万分の1地質図　蓼科山
5. 東京湾周辺域地質図
6. 日本地質図索引

また米国石油地質学会その他がスポンサーとして推進の環太平洋地域地質図計画の展示場には　わが国担当の北西太平洋地区の原図も出品された．　今回の展示でとくに注目を集めたのは　期間の後半になって追加展示された400万分の1中国地質図および地質構造図で　今大会中台湾に代り　IUGS　への中国代表として正式に登場した中華人民共和国による IGC　での最初の活動の一つであった．

8. 懇親プログラム

会議と並行して出席者の同伴家族を対象としたいくつかのプログラムも用意されていた．　中でも前回のモントリオールに続いて今回も開かれた子供のためのJunior Congressは100余人の参加者があって大変好評であったという．　会議出席者をも対象として昼休みを利用して開かれた公開講座も好評で　とくに月や火星についての最新の情報を紹介した米国チームの講演には大きな人気が集まった．

シドニー市の篤志家の協力で海外からの出席者やその家族を一夕自宅に招待して食事を共にするというHome Hospitality　という企画もあった　申込みがおそくて残念ながら筆者はその幸運に恵まれ損ねたが　懇親会運営費の節約にもつながる妙案であった．

9. 中国のIUGS加盟

IGCというのは元来他の如何なる国際組織とも関連しない独立の国際学術集会で　主催国と決められた国がその都度独自に組織運営委員会をつくって立案実行し　次の主催国に引継ぐという形をとっている．　しかし1961年にIUGS（国際地学連合）が発足して以来　これがIGC

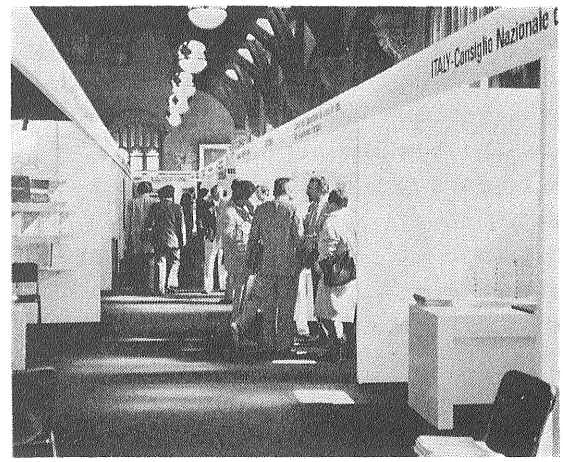

写真10　展示会風景

の恒常的なスポンサーとして加わる形になり　このためIGC 開催の折には IUGS も常に理事会総会を開き　傘下の各組織がそれぞれの事務連絡会議やシンポジウムを開くという習慣になった．　IGCの諸行事への参加はすべて個人の資格で行なわれ国籍による制限など全く受けないが　IUGS への加盟は国単位であるためときに面倒な問題が起り得る．　今回開かれたIUGS総会においてかねてから問題が生じていた中国代表権問題をめぐりこれ迄の会員であった中華民国（台湾）を除名して　代りに中華人民共和国の加盟を承認するという決定がなされたが　己むを得ない措置とは言え一部にすっきりしないものを残したことも事実であった．　ただ中華人民共和国のIUGS参加によって　これ迄空白に近かった中国大陸の地質に関する情報が身近かなものとなる途が開かれたことは　大いに慶ぶべきことであろう．

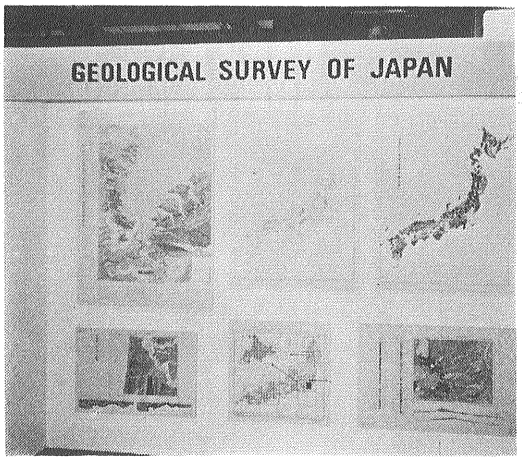

写真11　展示会の日本コーナー

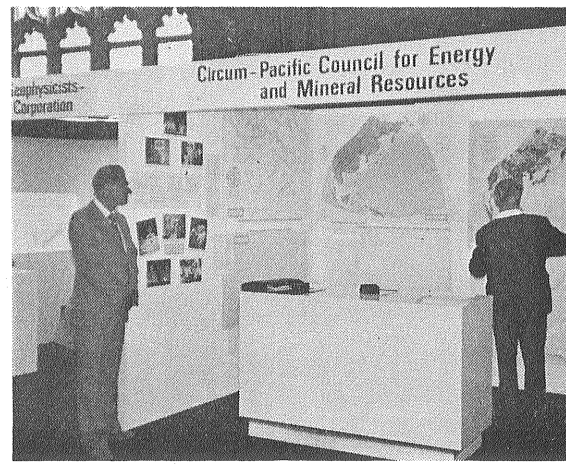

写真12　環太平洋マップ計画の展示

10. 閉 会 式

今回の IGC および関連の諸行事は 会議後の野外巡検を除き8月25日の閉会式ですべて終了した. 式はシドニー大学のGreat Hallで行なわれ 会長の Dr. Fisher 事務局長の Dr. Renwick による挨拶と報告のあと 会場を提供して今大会を成功に導いたシドニー大学への感謝の決議がなされ 同大総長の Sir Hermann Black から答辞があった. 次いで万国地質学会議の6慣用語を母国語とし かつこれ迄に会議を招致したことのある各国 すなわちフランス イタリア ドイツ 米国 ソ連 スペイン の代表からそれぞれ謝辞が述べられた. 今回の IGC では オーストラリアが英語国であることも原因したと思われるが 学術講演では大部分の発表者が英語を用いたようであり この閉会式での各国代表の挨拶もフランス以外は主に英語で行なわれた. 英語が唯一の実用的国際語となりつつあるのは IGC の世界でも最早動かし難い傾向の様に思われる. もっとも れっきとした英語国のオーストラリアにおける英語が英本国のそれや米語とはかなり違った発音やアクセントを持ったものであるし 非英語国民の "英語" に至っては それぞれのお国訛りに文法上の不正確さも加わるので とても一口に英語とは呼べないものも多い. 閉会式でのイタリア代表が "やがてわれわれ一同が一つの英語を話せる様な日の来ることを切望する……" と述べたのはこの間の事情を言い得て妙なるものがあった.

なお会長による閉会宣言に先立ち 次回 IGC の主催国と決ったフランスの代表から挨拶があり 第26回会議は100年祭を兼ねて IGC 発祥のゆかりの地パリで1980年に行なうこと 野外巡検の企画には英国および西ヨーロッパ諸国が参加協力する予定であることが明らかにされた. 比較的晴天の多い冬のシドニーにも珍しいおだやかな好天続きに恵まれ 第25回 IGC はかくして無事その幕を下ろした.

10. 会 議 全 体 を 振 返 っ て

以上第25回万国地質学会議の模様をあらまし紹介したが 巡検旅行も含め会議はまことによく準備され 運営もみごとであったと言うべきであろう. 組織委員会をはじめとするオーストラリア関係者の努力は賞讃に値する. それにつけても英語を母国語とし 国際会議で言葉の問題をほとんど気にせずに済む国は全く羨しい. 非英語国とくに日本のような国にとっては すべてに先立ってこの問題が立ち塞がるのだから.

前回の第24回 IGC がカナダのモントリオールで開かれたとき ますますマンモス化し且つ豪華になるこの会議の在り方に論議が出 このままでは遠からず IGC を継続することは不可能となるであろうとの危惧が出席各国の代表から表明された. これに対する反省から 今会議では規模の縮少と経費節減が努力され 既述のようにそれぞれにある程度の成功を収めた. 経費節減でとくに効果があったのは 今回から IGC 規約を改訂することにより 本論文の印刷を取止めたことで カナダの場合総経費140万 Can. ドルの中の半分近く(60万ドル)を食ったと言われる印刷費がこれで大幅に減ることになった. また展示や懇親会その他のレセプションも控え目に行なわれた. しかし 筆者のみた限り同伴家族向けのプログラムまで含め 必要とみなされるものはまずすべて用意されていたようであり これらすべてが予算通りの25万 Aust. ドル (前回経費の1/4弱) そこそこでまかなわれたのだとすれば 組織委員会をはじめ関係者の手際は驚嘆に値すると言うべきであろう. これには恐らくシドニー大学を利用できたことによる会場費の節約

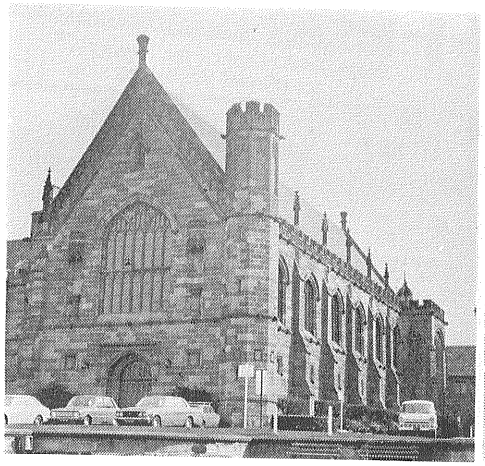

写真13 閉会式場のシドニー大学 Great Hall
石材は Hawkesbury 砂岩

写真14 閉会式場における第25回 IGC 要人

をはじめ　多くの公共機関からのさまざまな形での協力や奉仕があったためと思われる．

シドニー大学の会場が何かと便利に準備されていたことは既に触れたが　出席者のための宿舎に　ちょうど冬期休暇中の大学のカレッジがフルに利用できたのも大変に好都合なことであった．　勿論カレッジの収容人員は限られており　これを利用したのは全参加者の1/3には満たなかったのではないかと思われるが　3食付きの個室で10日間で約4万円というのは　高い航空賃を払って参加しなければならない海外の人間にはとくに有難いものであったに違いない．　また落着いたふんい気の昔ながらのカレッジの食堂で各国からの仲間と食事を共にし広い芝生や木々の多いキャンパスを通って会場へ往復するという毎日は　まことに快適であった．

ところで経費節減のため取止めとなった論文印刷に代る手段として　今回は従来よりも長文の要旨集が出版され　また各講演者はそれぞれの論文を　もっとも適当と思われる既存の国際誌に投稿できる形で準備して来るように指示された．　これは組織委員会としては当初多くの国際専門誌が　それぞれ IGC 特集を企画して関係の論文を吸収してくれるものと期待していたかららしいのであるが　よくまとまった一部のシンポジウムを除いてどうやらこの当ては外れたらしい．　おそらく予想される膨大な論文数と　その少なからざるものが質的に必ずしも高いとは期待できないことを恐れた多くの雑誌編集者が　IGC特集には拒絶反応を示したということらしい．考えてみれば　たださえ投稿過多の傾向が強い国際雑誌群が　いかに分散投稿されたとしても1,000篇を超える論文を短時日に消化できる筈はなく　むしろ当然の成り行きと言うべきであろう．　この結果各人は IGC とは無関係に　それぞれ個人としてしかるべきところに論文を投稿するというケースが大方となり　組織委員会としてはそれらのデータを集めて　いずれ出版される会議報告にその一覧を示すつもりらしいが　本論文印刷の歩止りは余り高くならないのではないかという気がする．

筆者は4年前第24回 IGC の出席報告（地質ニュース No. 255　p. 20—26　1973　柴田賢氏と共著）をまとめた折　実質的活動内容は別にして　出席者数や　論文の発表件数といった数字の上だけから見ても　日本のIGCでの活動はいささか貧弱に過ぎるのではないかとの感想を述べたことがある．　同じ数字だけから見るならば第1表に示された如く　今回は日本も仲々いいところに行っていると言ってよさそうである．　筆者の知るところでは今回は私費による出席者が多かった様子で　民間旅行社による団体割引が利用できたという事情と巡検旅行の魅力という背景があったにしても　やはりこの国の科学者の生活にも従来は全く考えられなかった経済的余裕が多少とも生じて来たということであろうか．　私費によると思われる出席者の中に　比較的若い人達が目立ったことも今迄に無かった傾向であった．　国際会議と言えばおおむね国費・公費を貰って出席するボス先生に限られていたパターンに変化が生じつつあるのだとすれば好ましいことである．

12. 第27回 I G C の日本招致問題

すでに今会議のための 3rd Circular にも印刷され閉会式でもあらためて報告されたごとく　日本は8年後の1984年に第27回 IGC を招致する可能性のある国として名乗をあげている．　現在までに招致を申し出ている国としては日本のほかにトルコおよびソ連がある．　これ迄アジア地域での IGC としては　第22回（1964）のインドがあるのみであり　近年の日本の"国力"からみても　日本の立候補は諸外国には極めて当然の動きと受取られているのではないかと思われる．　しかし　名乗をあげるまでの経緯についての八木健三氏の報告（地質雑　Vol. 82　p. 221—222　1976）からも察せられるように　この問題については国内の関係筋の間に今もって充分なコンセンサスが得られているとは思われない．
最近になり日本地質学会においてはその国際協力委員会が中心となり問題の検討に入る準備を進めつつあると聞くが　1980年のパリにおける第26回会議までには　わが国としての最終的態度を決める必要に迫られており　いずれにせよ余り悠長に構えている訳には行かぬであろう．

IGC と言っても　実際には IUGS 関係の諸会合やシンポジウムも同時に開かれるので　それらすべてを準備するための労力は並大抵のものではない．　加えて　言葉のハンディキャップからまだ当分は解放されそうもないわが国の場合　会議の規模を考えるとその困難さはまことに計り知れぬものがある．　昨年わが国が立候補に踏切った際の主な判断材料となったと言われる財政的見通しなどは　この点むしろ最も解決が容易な問題ではなかろうか．　さらに　IGCにおける最大の目玉であり　それの企画実行が主催者に義務付けられてもいる巡検旅行は　日本開催となれば当然東南アジアや朝鮮半島　さらには中国あるいはカムチャツカ　シベリアの一部などにも及ぶものを期待されるであろうが　前提となる国際政治情勢の見通しも　ここ当分は立ち難い．

以上それやこれやを考え合わせると　筆者には　1984年の IGC 日本招致は成功の見通しが極めて薄く　時期尚早と考えられるのだが　それは単なる一個人のペンシズムであろうか．